浦和学院と教育交流提携

矢野学長「高大の接続を強化」

専修大学は浦和学院高校（埼玉県さいたま市、小沢友紀雄校長）と教育交流提携に関する協定を締結し、3月24日、調印式を行った。本学が教育交流提携に関する協定を結ぶのは初めて。提携に基づく教育交流プログラムを行うほか、2017年度入試から提携校推薦入試を実施する。

そのほか年1回、学長や校長らによる教育交流提携協議会を開催する。

生田キャンパスで行われた調印式には、浦和学院高から小沢校長ら教職員18人が、本学から矢野建一学長や各学部長ら21人が出席。小沢校長と矢野学長がそれぞれ協定書に調印、交換した。

矢野学長は「埼玉県内に本学と密接なつながりを持つ高校ができることは意義深い。入試広報にとどまることなく、高大の接続を強めていきたい」とあいさつ。小沢校長は「これまでは高校から巣立った生徒が大学で成長していく過程を細かに把握することができていなかったが、本協定により卒業生が大学でどのように学び、成長するか知る機会ができた。新しいつながりに期待する」と述べた。

▶ 握手を交わす矢野学長（左）と小沢校長

日髙理事長ら美唄市訪問

北海道短大　施設引き渡し

2013年6月で閉学となった専修大学北海道短期大学の廃止手続きを進めている学校法人専修大学は、同短大の校地・校舎一式をディスカバリー有限責任事業組合（東京都）に売却することになり、3月31日に施設引き渡しを行った。

これに先立つ29日、日髙義博理事長は美唄市役所を訪問。髙橋幹夫市長に1968年の開学以来の地元の支援にお礼の言葉を述べた。髙橋市長からは約半世紀にわたる地元への貢献に謝意が送られた。

▲ 美唄市役所で日髙理事長（前列左から5人目）と髙橋市長（同6人目）

▲ 施設引き渡しを前に実習室で使われた実習器具を確認する法人役員

台湾の歴史、文化の理解深める

学生部セミナー

異文化体験を通し、多様な価値観を養うことを目的に毎年春期休暇中に開催している学生部セミナー。今年は5学部6人が参加し、3月1日から8日まで、台湾の中山大学（国際交流協定校）で語学研修に励んだり、高雄市や台北市でフィールドトリップを行ったりして、台湾の歴史や文化への理解を深めた。

引率の佐竹弘靖学生部次長（ネットワーク情報学部教授）と学生6人は、まず中山大学のキャンパスツアーに出発。キャンパスは高雄市郊外の高台に位置し、プライベートビーチもある。

「生田キャンパスと同じように自然に恵まれている。始業時間になると周辺道路はバイクだらけになり、とても活気があった」と玉田未咲さん（商4）。

篠原有希さん（経営4）は「学食もたくさんあるが、外には屋台が出ていて、中山大学の学生はそこで朝ごはんを買って授業に向かうという感じだった」と独特の習慣に驚く。また茂木美香さん（法3）は、学生が夜遅くまで大学で過ごしていたり、市民のための講座が開講されていたりしたことが印象的だったという。

中山大学では語学研修も行われた。「発音に悩んだ」という小林大祐さん（商2）だが「先生のおかげで会話を覚えることができた。今後も中国語を勉強したい」と決意も新た。

フィールドトリップでは傘づくり体験やお茶の講習、故宮博物院の見学などがあった。

森下優杜さん（経済4）は「世界史が好きで台湾の歴史もずいぶん学んだが、実際に史跡などを訪問して、歴史がより身近に感じられた」と振り返る。

また、台湾在住の校友との夕食会もあり、親交を深めた。

セミナーを通じて太期咲さん（文2）は言葉の壁を痛感すると同時に、日本では気づかなかった価値観を発見。「セミナーに参加して体験したこと、感じたことを生かし、より広い世界へ視野を広げていきたい」と希望を語った。

▶ 中国語研修に励む参加者

▶ 傘づくりに挑戦

小中学生がアメフット体験

専修大学アメリカンフットボール部「グリーンマシーン」の下部組織である「川崎リトル・ジュニアグリーンマシーン」は3月の毎週日曜日、小中学生を対象にした体験教室を生田キャンパス北グラウンドで開催した。今年から小学生低学年でも参加できるフラッグフットボールも導入。子どもたちはグラウンドを駆け回り、アメリカンフットボールやフラッグフットボールの楽しさを体感した。

フラッグフットボールは、タックルの代わりに腰に付けた旗（フラッグ）を取る、アメリカンフットボールが起源の新しいスポーツ。

3月6日は小学生チーム「川崎リトルグリーンマシーン」の練習に初心者4人が参加した。楕円（だえん）ボールを使ったキャッチボールからスタート。高学年は防具とヘルメットを着け、ブロックや基本的な動きを学んだ後、実践形式の練習に挑戦した。低学年の子どもたちはフラッグフットボールを楽しんだ。

初めて参加した小学2年生の男子は「楽しかった。フラッグを取られないよう、頭を使った」と満面の笑顔で汗をぬぐっていた。

また、練習終了後には低学年の子どもたちも防具を着せてもらい、選手気分を味わった。

川崎リトル・ジュニアグリーンマシーンの斎藤茂清監督は「小さなうちにフラッグフットボールやアメリカンフットボールを体験すると、敏しょう性などが鍛えられる」として、ジュニア・リトルグリーンマシーンへの参加を呼び掛けた。

▲ アメリカンフットボールを体験する小学生たち

ワークショップ開催

◆少年少女レスリング教室◆

「少年少女レスリング教室」の参加者を対象にした初のワークショップが3月12日、生田キャンパスで行われた＝写真。幼児から中学生までのジュニアレスラーと保護者ら49人が参加した。

講師は同教室で指導している木村元彦ヘッドコーチ（教務課職員）。参加者はレスリングの映像を見ながら多様な価値観に触れ、スポーツと自分自身の生き方（デュアルキャリア）について考えた。

「デュアルキャリアという言葉を初めて知って勉強になりました」「スポーツをどの年齢まで続けるか意識できた」などの感想が聞かれた。

「少年少女レスリング教室」（TEAM BISONS）は、スポーツ研究所が主催するスポーツ講座。生田キャンパスレスリング場で、5歳から高校生までにレスリングを指導し、心と体を鍛え、次世代のレスリングチャンピオンを輩出することを目的にしている。

コーチは本学レスリング部OB有志。参加者は2009年発足当初は数人だったが、現在70人。神奈川県外からの参加者もいる。

（相澤勝治文学部准教授）